

〔小笠原諸島自生種による植生回復技術の開発〕

## 苗木生産技術の開発

### ～ノヤシの幼木期の施肥量の解明～

宗 芳光

(小笠原農セ)

---

【要 約】ノヤシの生育状況および使用した肥料の価格から評価すると 180 日タイプの被覆燐硝安加里(N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O=14-12-14)を用いた場合には、6 g/L/年が適切な施肥量である。葉長点高の生長は試験開始から 1 年間で 2 倍以上の 175cm となる。

---

#### 【目 的】

ノヤシはかつて小笠原諸島全域で群落を形成し、森林を構成するヤシ科の唯一の固有種であるが、現在は絶滅危惧種となっている。その希少性や樹形などから、公園や街路樹など公共工食用樹としての要望があるため、効率的に生育する技術を確立する。

#### 【方 法】

父島字奥村で採種し、2009 年に発芽したノヤシの 3 年生実生苗を用いた。2011 年 1 月 31 日に 9 号鉢(6.4L)に鉢上げし、鉄骨ハウスで育苗し、試験を開始した。用土は赤色土を用いた。肥料は 180 日タイプの被覆燐硝安加里(N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O=14-12-14)を用いて 2011 年 1 月、6 月、2012 年 2 月、7 月に施用した。試験区は 0、3、6、9、12 g/L とし、各区 6 株とした。灌水頻度は夏期に 3 回/週、それ以外は 2 回/週とした。調査項目はヤシ類の出荷基準を参考にして生長点高、葉長点高および玉直径とした(図 1)。

#### 【成果の概要】

1. 玉直径：0 g/L 区では栽培半年目から生長が横ばいとなり、試験開始時の 2.4cm から 2013 年 1 月時点では 3.5cm となった(図 2)。3、6、9、12g/L 区の生長は試験開始時の 2.4～2.6cm から 2013 年 1 月時点では 7.9～8.6cm となった。
2. 生長点高：栽培 1 年目の 6 月頃から伸長し、12 月頃から鈍化した。2 年目の生長は 1 年目よりも低下した。0 g/L 区では試験開始時の 24cm から 2013 年 1 月時点では 25cm となった(図 3)。3、6、9、12g/L 区の生長は試験開始時の 25～26cm から 2013 年 1 月時点では 70～76cm となった。
3. 葉長点高：生長点高と同様の生長を示した(図 4)。栽培 1 年目の 6 月頃から生長が高くなり、12 月頃から鈍化した。2 年目の生長は 1 年目よりも低下した。0 g/L 区では試験開始時から生長せず、2013 年 1 月時点でも 73cm であった(図 3)。3、6、9、12g/L 区の生長は試験開始時の 74～78cm から 2013 年 1 月時点では 214～224cm となった。
4. まとめ：玉直径および葉長点高の生長は 3、6、9、12g/L 区でともに高いが、生長点高が 3g/L 区で低いこと、肥料代を考慮すると幼木の適切な施肥量は 6g/L である。また、栽培 2 年目の生長点および葉長点の生長が 1 年目よりも低い要因は鉢上げしなかったことが考えられる。このことから、この鉢サイズでの育苗期間は 1 年が適切であると考えられる。
5. 留意点：2012 年 5～7 月にカイガラムシ類によるすす病が発生した。また、2012 年 10～12 月にカンザワハダニが発生し、葉の一部が褐変した。

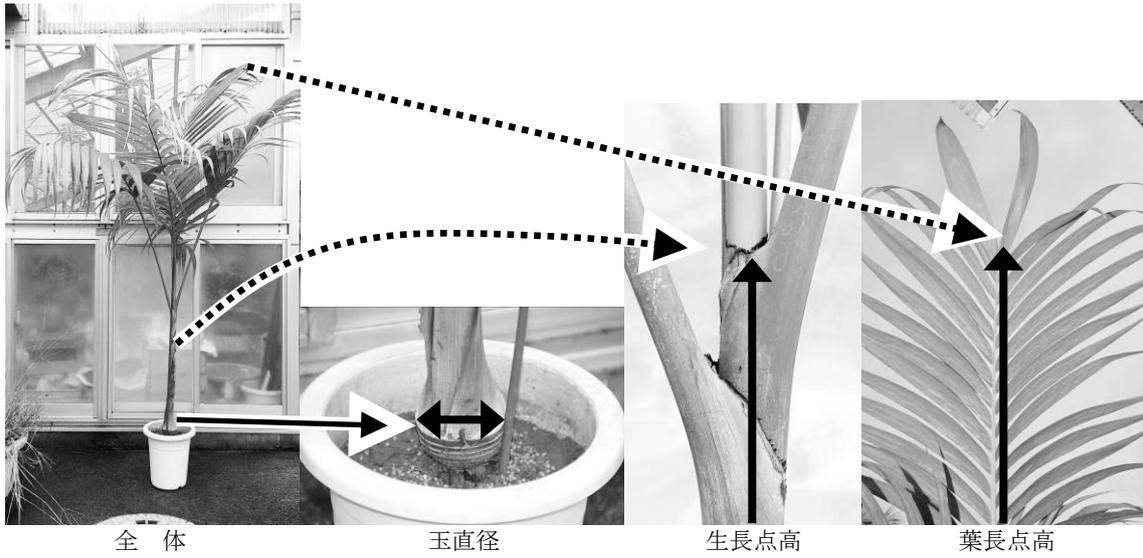


図1 ノヤシの測定部位

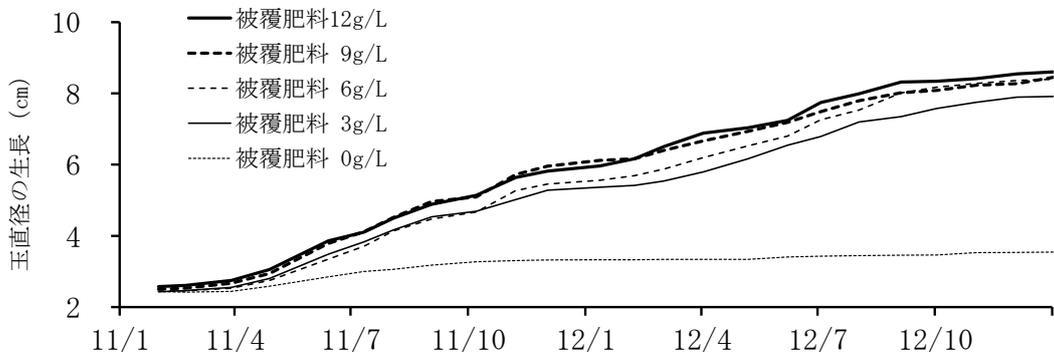


図2 赤色土で鉢栽培したノヤシの玉直径の生長

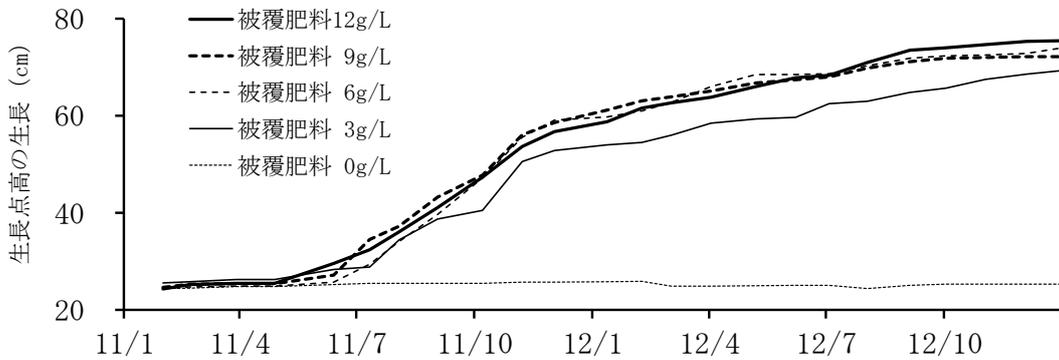


図3 赤色土で鉢栽培したノヤシの生長点高の生長

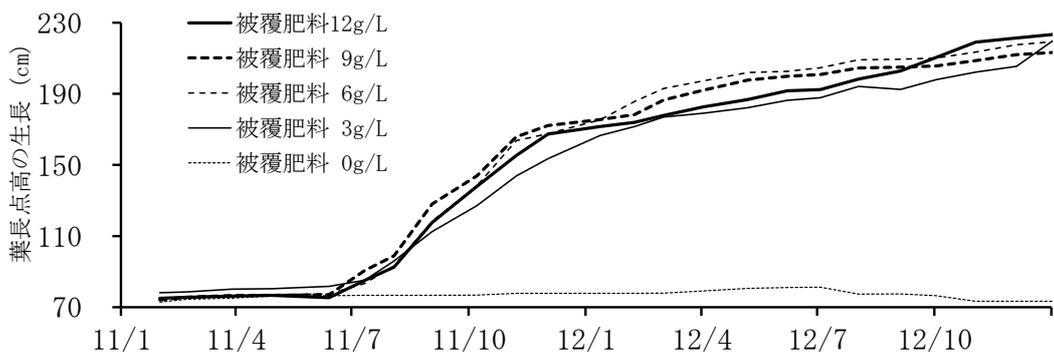


図4 赤色土で鉢栽培したノヤシの葉長点高の生長